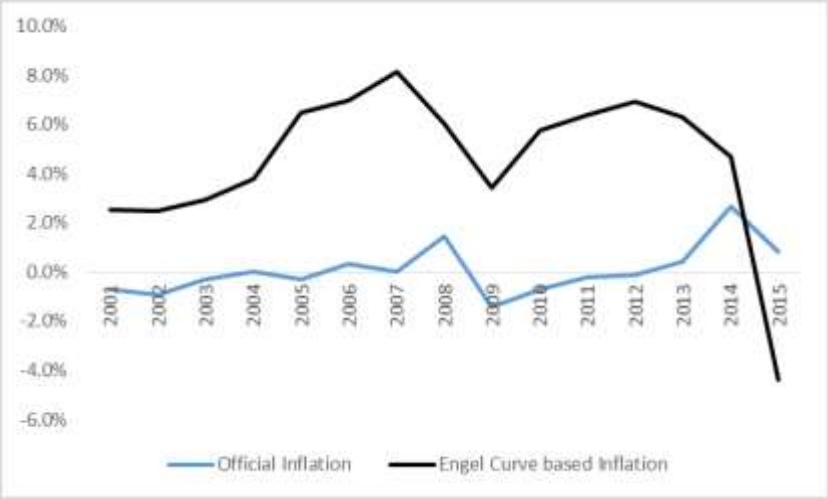
# 日本の消費者物価指数のバイアスに関する考察
## ーエンゲル曲線を用いたアプローチー

明海大学 経済学部
小黒　曜子*

要旨

日本経済は、1990 年代初めのバブル崩壊以降、失われた 20 年と呼ばれる低成長とデフレーションを経験してきた。雇用機会は十分とは言えず、非正規雇用の割合は 4 割を上回り、所得は低下傾向にある。このような状況下で、日本における実際の生活水準を検証しようというのが本稿の目的である。本稿は、失われた 20 年を含めた期間の日本の消費者物価指数をエンゲル曲線を用いて推計した初めての研究である。

ある年のエンゲル曲線が前年と比較して上方にシフトしている場合、その年のある財・サービスに対する支出の割合は前年よりも大きいことになる。エンゲル曲線の上方シフトは、消費者物価指数の下方バイアスを示唆する。所得の減少が起こった場合、価格の安い代替材への消費の転換が生じるはずであるが、このことが考慮されていないことにより消費者物価指数にバイアスが生じる。近年の日本の所得は低下傾向にあり、エンゲル係数には上昇傾向が見られる。エンゲル曲線を推定することで得られたインフレーションと公式に発表されているインフレーション（総務省統計局の消費者物価指数）を描いたのが以下の図である。本稿で得られた結論は、2001 年以降の日本の消費者物価指数には概ね下方バイアスが生じていたことを示す。




* oguro.yoko[at]gmail.com（[at]を@にして下さい。）国際基督教大学社会科学研究所 研究員。2016 年 4 月～2017 年 8 月まで Department of Economics, SOAS University of London (School of Oriental and African Studies) visiting scholar。